子どもの豊かな感性・思いやり・協調性を育む

自然との
ふれあいを
大切にする

ドイツの園づくりツアー2018

実施レポート

子どもたちの心とからだの成長は、五感を通じて自然とふれあい、自然の美しさや不思議さを他者と共有することで促されます。「園庭ビオトープのある園」は乳幼児期の子どもたちが、豊かな感性や思いやり、協調性、創造力などを育む場所として最適な環境です。

保育・幼児教育と自然・環境の重要な関係性が認識されるなか、10月15日～21日に南ドイツのバイエルン州を訪れ、園と自然景観設計士（日本で言うビオトープ管理士）、保護者･子どもたちが協力してつくった園庭ビオトープや自然体験の遊び場などを見学していただくとともに、幼年期教育研究所や自然体験センターでお話をうかがいました。これはそのレポートです。

視察企画：（公財）日本生態系協会
後援：（社福）日本保育協会、（公社）全国私立保育園連盟、（NPO法人）全国認定こども園協会、日本ビオトープ管理士会　　協力：（株）チャイルド本社、ひかりのくに（株）、（株）メイト

目次

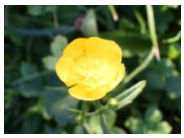
訪問先の位置　3

バイエルン州における保育・幼児教育の背景など　4

公立サンクト・ニコラウス幼稚園　6

テレジア・ゲルハルディンガー幼稚園　8

バイエルン州立幼年期教育研究所　10



自然の子サンクト・ゲオルグ保育所幼稚園　12

エグルフィング自然体験の遊び場　14

オーバーアマガウ森の幼稚園　16

サンクト・クイリヌス保育所幼稚園　18

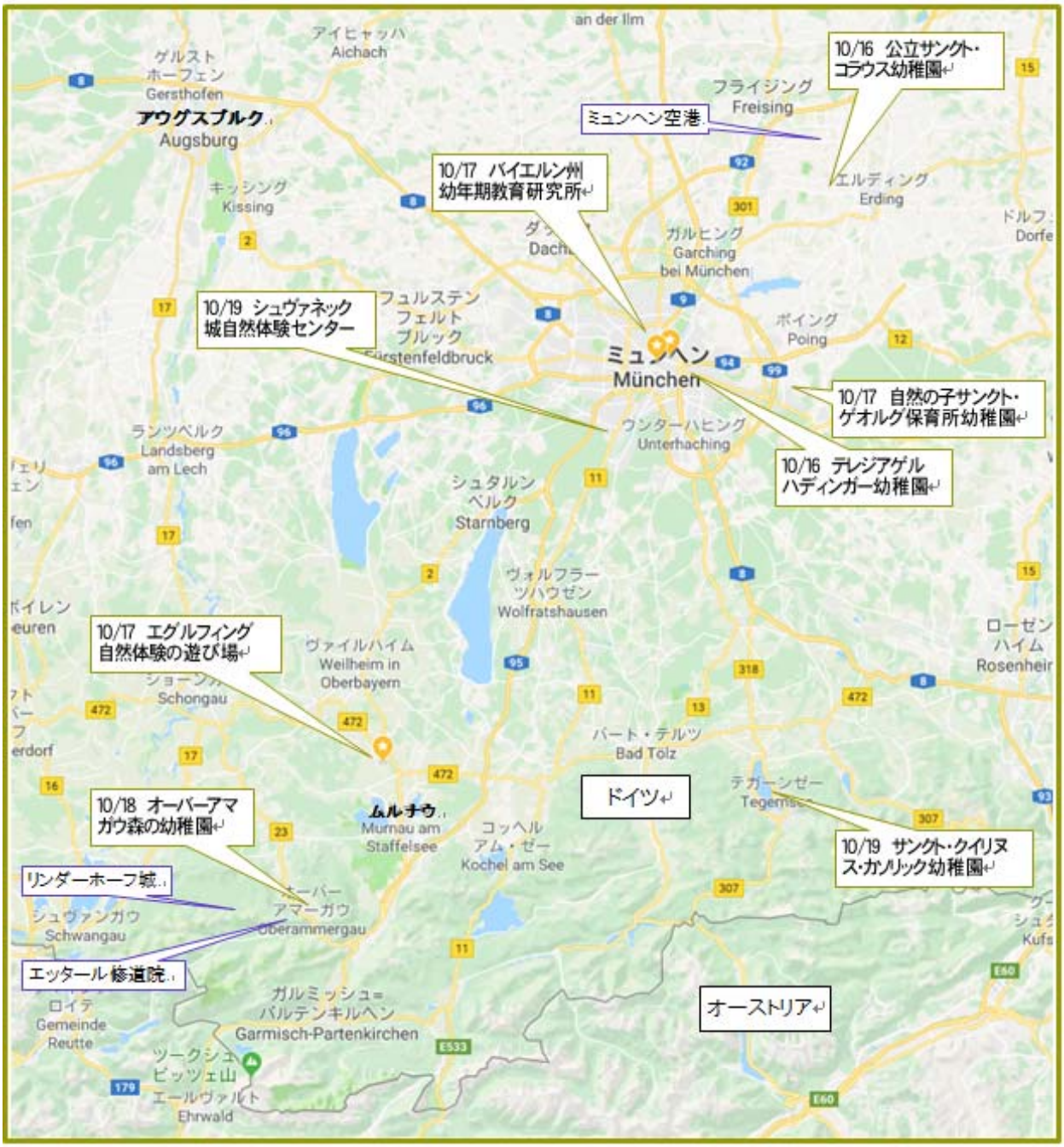
シュヴァネック城自然体験センター　20

番外編（旅の風景）　22

表紙：公立サンクト・ニコラウス幼稚園

■訪問先の位置

ハンブルク
ブレーメン
ベルリン
ハノーバー
ライプチヒ
デュッセルドルフ
ドレスデン
ボン
フランクフルト
シュツットガルト
ミュンヘン
ポーランド
オランダ
ドイツ
チェコ
フランス
オーストリア
アウグスブルク
ムルナウ


10/16 公立サンクト・コラウス幼稚園
ミュンヘン空港
10/17 バイエルン州幼年期教育研究所
10/19 シュヴァネック城自然体験センター
10/17 自然の子サンクト・ゲオルグ保育所幼稚園
10/16 テレジアゲルハディンガー幼稚園
10/17 エグルフィング自然体験の遊び場
10/18 オーバーアマガウ森の幼稚園
10/19 サンクト・クイリヌス・カソリック幼稚園
リンダーホーフ城
エッタール修道院
ドイツ
オーストリア
アイヒャッハ
Aichach
ゲルストホーフェン
Gersthofen
アウグスブルク
Augsburg
フライジング
Freising
エルディング
Erding
キッシング
Kissing
ガルヒング
Garching bei München
フュルステンフェルトブルック
Fürstenfeldbruck
ポイング
Poing
ミュンヘン
München
ウンターハヒング
Unterhaching
ランツベルク
Landsberg am Lech
シュタルンベルク
Starnberg
ヴォルフラーツハウゼン
Wolfratshausen
ヴァイルハイム
Weilheim in Oberbayern
ローゼンハイム
Rosenheim
ショーンガウ
Schongau
バート・テルツ
Bad Tölz
テガーンゼー
Tegernsee
ムルナウ
Murnau am Staffelsee
コッヘル アム・ゼー
Kochel am See
オーバーアマーガウ
Oberammergau
シュヴァンガウ
Schwangau
ロイテ
Gemeinde Reutte
ガルミッシュ=パルテンキルヘン
Garmisch-Partenkirchen
ツークシュピッツェ山
エールヴァルト
Ehrwald

■バイエルン州における保育・幼児教育の背景など

持続可能な開発のための教育プラン（BNE）

2002 年、国連ヨハネスブルグ・サミットにおいて、日本政府と NGO の共同提案により、「国連持続可能な開発のための教育（ESD）の 10 年」が採択されました。これを受け、「国連 ESD の 10 年国際実施計画」(2005 年～2014 年) が 2005 年に策定され、世界各国にその推進が呼びかけられました。計画期間後の 2014 年以降も、引き続き、持続可能な開発のための教育の更なる推進強化が求められるなか、ドイツでは、人格形成上最も重要な幼児期に、協調性や豊かな感性、健康な体、新しい時代にふさわしい考え方や行動などを育むため、『野生の生きもの』、『水』、『土』、『太陽の光』を重要視して、園庭や園舎を見直す動きが進んでいます。州立幼年期教育研究所（IFP）でお話をうかがったバイエルン州「持続可能な開発のための教育プラン（BNE)」の策定もこうした流れの一つです。

連邦政府の園庭の生物多様性を高めるプロジェクト

日本と同様に、生物多様性条約に批准しているドイツでは、その約束を果たすために『生物多様性国家戦略』を策定し、それに基づいて、都市や農地における生物多様性の保全回復プロジェクトなど、政府による多岐にわたる取り組みが実行されています。地域在来の植物を園庭で育てるなど、身近な生きものたちとの日常的なふれあいを促す園づくりの支援もそうした取り組みの一環です。連邦政府が全国規模で進めているプロジェクト『保育所幼稚園の子どものための庭　－　一緒に多様性を発見しよう（Kinder-Garten im Kindergarten - Gemeinsam Vielfalt entdecken)』は、絶滅の危機にある多様な野生生物に対する保護の意識を幼少期から育てることをねらいとしています。生物多様性の豊かな園庭や、自然体験などについての情報交換や交流のための保育所・幼稚園等の全国ネットワークには、約 200 カ所の園が参加しています。

共生社会に向けた保育・幼児教育

共生社会の形成に向けた制度づくりも進んでいます。『インクルーシブ保育・教育』は、障害の有無や、年齢・性別・人種・言語・文化・宗教的背景の違いにかかわらず、一緒に遊ばせながら、子ども一人一人の保育や教育的ニーズにあった支援を行うものです。バイエルン州の幼児教育プランでは、幼稚園において、3 歳から 6 歳の異なる年齢によるクラス編成が義務づけられています。園によっては 3 歳未満の乳幼児も一緒に遊ばせています。『保護者イニシアティブ』は、園の運営や行事の企画実施などについて、保護者と連携しながら行うための取り組みです。インクルーシブ保育・教育は、子どもたちの他社への理解を深め、思いやりの心や助け合いの精神を養うのに役立ち、保護者イニシアティブは、連携を通じて、保護者の信頼や様々な協力を得るのに役立っています。

子どもを守るための制度

ドイツでは、3 歳以下の子どもは何らかの施設で保育を受けることが法的に保障されており、通常は 1 歳を過ぎてから、早い子では 8 カ月くらいから保育所に入園します。他方、SNS などの利用が拡大するなか、子どもの肖像権の侵害の増加などの問題も深刻化しています。こうした問題から子どもを守るため、バイエルン州では、個人的な子どもの写真を保護者の許可無く撮影し、ソーシャ

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ルメディアなどに掲載することが禁止されています。グループ写真を撮影する際にも、保護者の承認・署名が必要になることもあるようです。

技術検査協会（TÜV：Technischer Überwachungs-verein）

技術検査協会は、様々な施設などの技術的な安全性を審査する公的機関で、保育所幼稚園の園庭や遊び場なども、この機関の審査対象となっています。ツアー中も多くの場面で、TÜV（**テュフと発音**）の名前を耳にしました。10 年以上前は、園庭ビオトープや自然体験の遊び場はまだ希有な存在で、安全性も保障もないという雰囲気だったが、現在は一つの確立したジャンルとして受容されています。審査は一般的な園庭や遊び場とは異なる基準で行われているということでした。

自治体からの幼稚園に対する補助金制度

森の幼稚園に確認したところ、幼稚園に対する補助金は、各州政府（現地では連邦政府というお話でしたが）が各々の規定に基づいて支払っています。バイエルン州では、州の補助金はまず自治体（市）に支給され、自治体が追加の補助金を加算して幼稚園の運営者に支給されます。バイエルン州の補助金は、基本補助金額に、預かる時間が長い場合の加算金、保育の必要性・障害児やドイツ語が話せない子どもの対応などの追加金、また専門性の高いスタッフがいるなど質的要素を加味して計算されます。オーバーアマガウ森の幼稚園では、週平均 20 時間として、子ども一人当たり月額約 200 ユーロの補助金が支給されているそうです。さらに、就学前の子どもには、別途月額 100 ユーロが自治体から支給されます。保護者が支払う金額は、月謝の 90～110 ユーロと保護者会費なので、就学前児童の場合は月謝はほぼ相殺されるということになります。

クレッター・ミカド

園庭を見学している際に何度か目にしたクレッター・ミカド。複数の倒木を組み合わせるように設置したこの遊具は、『ミカド』というゲームに似ていることからその名前が付けられたということでした。このミカドはあの「帝」に違いないと調べたところ、やはりこのゲームは、日本から輸入されヨーロッパで人気となったもので、41 本の竹ひごを少し重なるように立て、倒さないよう 1 本 1 本順番に抜いていきます。竹ひごの絵柄によって 5 段階の点数が付いており、抜いた竹ひごの合計点を競うというゲームです。最高得点のミカド（帝から来ています）は 1 本で 20 点。ほかマンダリン 10 点、ボウズ 3 点、サムライ 3 点、クーリー2 点となっています。

マイバウム

ツアー中には、公立サンクト・ニコラウス幼稚園や町の入口、中央広場など、いろいろな場所でマイバウム（Maibaum: 5 月の木の意、英語ではメイポール）を見かけました。ドイツでは、昔から、5 月 1 日のメイデイにこのマイバウムを立てる風習があるそうです。マイバウムには生木が使われ、色を塗って、町にある代表的な施設や店、職業などを描いた小さな旗のようなものが付けられます。3 年から 5 年に一度新調され、その際にはお祭りが催されます。バイエルン州のマイバウムは、バイエルンカラーの青と白に美しくペイントされていました。サンクト・ニコラウス幼稚園のマイバウムには、たくさんの旗に混じって幼稚園の旗もありました。

■公立サンクト・ニコラウス幼稚園

園庭に来る生きものを通して自然について学ぶ

最初に訪問した公立サンクト・ニコラウス幼稚園は、ミュンヘン市の中心から北東に約 30km のノッツィングという地区にあります。園の入口付近には、バイエルンカラーの青と白のペイントでに色づけされたマイバウムが立っています。この園では、3 歳から 6 歳までの子どもたち 44 名を 6 名のスタッフで対応しています。来年は 2 歳児も加わり 52 名になる予定です。保護者の会による協力も積極的だそうで、訪問時も 3 名の保護者が手製のサンドイッチや飲み物を用意してくださいました。駆けつけてくださった市長さんと子どもたちとの記念撮影の後、園舎内と、在来の草木が生える 1520 ㎡の園庭を見学しながら、園長のシモーネ・タルハマー氏よりお話をうかがいました。

園には、異なる年齢を混ぜたハチ組とカタツムリ組の 2 クラスがあります。お迎え時間は、12:30 と 15;30。ジャガイモの産地であるこの地域は農家も多く、都会のように夕方まで共働というケースはまれで、昼過ぎのお迎えが多いそうです。園舎内には、工作室やキッチンなどがあり、遊びの多様性に心がけています。年長の子どもたちは、お片付け、草木の水やり、テーブルセッティングなどの作業を任されています。

この園では、自然体験ができる夢の園庭を実現するために、17 年前、園芸種のバラやヤナギを抜いて園庭改修を行い、その後、徐々にこの地域の自然に本来生えている樹種に植え替えました。野草が咲く小さな草はらの斜面もつくりました。在来の植物が茂る斜面は、夏の間たくさんの美しい野の花が楽しめるということです。

起伏のある園庭内には高木や中低木などたくさんの在来の木々が生えています（上）

青と白のバイエルンカラーが美しいマイバウム（右）

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

園庭には高低差 4.5m の小山のほか、岩場や、雨樋の水を流す小川があります。くねっと曲がった長い滑り台、鳥の巣型ブランコ、スラックテープ、吊り橋などの遊具を囲むように、10 本ほどの大きな木のほか、中低木が繁茂しています。なかには木登りをしてよい木もあります。リンゴ、スグリ、クワノス、クルミ、トチノキなど、果樹や木の実のなる木も多くあり、今年はリンゴが 100 年に１度の大豊作だったそうです。子どもたちは自分で実を摘んで食べることができます。

園には、たくさんの野鳥や昆虫のほか、ハリネズミも訪れるそうです。子どもたちはハリネズミの絵を描き、歌を歌い、本を読みます。園長先生は、「園庭に来る生きものを通して、子どもたちはより深く自然や野生の生きものについて学んでいます。園庭を自然豊かにしたことで、子どもたちの動きが非常に活発になりました。運動能力が向上していくのが見ていてよく分かります。また、積極的に話し合いをするようになり、他の子の意見を受け入れる能力や優しさも出てきました。園庭の遊具が少ない分、自分の工夫で遊びを創り出そうとする力が強くなりました」と語られていました。

今年の卒園記念に贈呈されたカラフルな鳥の巣箱（左）

小山の上に生える木登りができる木。ここからの景色は最高です（右）

自然保協会に所属する保護者の提案で作り直す予定の虫のホテル（左下）。筒状のものを縦に入れた方がツルツルした表面に虫が入りやすいとのこと。

吊り橋の様な遊具（左下）

木立の中を通って、蛇行して滑る滑り台。子どもの頃を思い出して、みんなで楽しみました（下）

■テレジア・ゲルハルディンガー幼稚園

私たちは自然と一緒に生きなければいけない

ミュンヘンの中心地にあるこの園は、3 歳から 6 歳までの子どもたち 52 人が通うカソリック系の幼稚園です。800 ㎡の園庭は大きな修道院の建物に囲まれた中庭にあります。ここでは修道服に身を包んだシスターのミッテラー氏が詳しく説明してくださいました。

ミッテラー氏 2000 年にこの修道院に配属されたとき、園庭はコンクリートで覆われた無機質なものでした。10 年前の水道管工事を機に、シスターのかねてからの夢だった『自然豊かな園庭づくり』に踏みきり、子どもや保護者の意見を聞き、自然景観設計士のアンゲラ・ハインさんと考えました。

子どもたちにとって重要なのは木や草があることなので、遊具は小山を滑り降りる滑り台とブランコの２つのみにしました。代わりに、絶滅危惧種を含む 200 種に及ぶ野草やハーブが生えています。またリンゴ、ナシ、サクランボ、プラムなど、大木にならない果樹もあり、子どもたちは自由に果実をもぐことができます。

園庭にはたくさんのビオトープの要素があります。飛び石を渡って渡れる水辺のビオトープには、夏には昆虫がやってきて、冬になると凍ります。大都市の子どもなので、皆大喜びでその様子を見たり、氷の上に乗ったりして遊びます。自然の石でつくった石垣は意図的に隙間を作って、トカゲなどのビオトープにしています。ハインブーヘ（シラカバ科の木）で作ったトンネル型の迷路は、春は芽生え、夏は緑の木陰、秋は紅葉、冬は積もる雪と四季折々の美しい姿を見せてくれます。この迷路は、子どもたちの大切な隠れ場所であると同時に、キツツキ、アオゲラ、アカゲラ、クロウタドリなど、多くの野鳥の憩いの場や巣作りの場でもあります。

水辺のビオトープ

ハインブーヘでつくったトンネル型の迷路の中

ビオトープにするため意図的に隙間をつくった石垣

２つある遊具の一つ

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ある時、教会の塔からハヤブサが降りてきて、子どもたちの目の前でクロウタドリを食べるというハプニングがありました。また、夏には敷地内を流れる川からビーバーが住処探しにやってきたそうです。そこで、自然保護 NGO の BUND とビーバーについて調べるプロジェクトを実施しました。河畔の斜面林には、フクロウやオオタカなどの猛禽類が暮らしています。サイクリング道路を作りたいという市から依頼がありましたが、子どもたちに静かな場所を保つためにお断りしたそうです。

シスターは、「園庭ビオトープづくりには失敗ということはない。それは全部自然のものだから。私たちが自然に合わせなければならない。自然豊かな園庭になって、子どもたちは精神的にとても落ち着き、喧嘩も減った。自然を大切にすることを頭で考えるだけでなく、行動するようになった。また、身体を動かすことに大きな喜びを感じるようになり、病気をする子も減った。自然の要素は一見危ない気がするが実は安全で、怪我もまったくない。」などの示唆に富んだお話がありました。

「この園庭づくりには完全に満足しているし、もう一度やれと言われたら全く同じようにしている。なぜならこれは私の夢だったし、私はこれをすることを許されたのだから」シスターはとても心豊かで幸せそうな笑顔で微笑まれました。園庭管理日『ガーテンターグ』には、いつも園児数より多い数の保護者が嬉々として作業にやってくるそうです。入園希望者と、園庭での作業を希望する保護者が非常に多いというのも納得がいきます。

修道院の建物の中庭になる園庭（上）

「人間に自分の場所が必要なように、木や草、植物も自分の場所が必要だということを子ども達に教えています」と語るシスター（左）

ビーバーが来たアウアーミュールバッハ川（右）

■バイエルン州立幼年期教育研究所

地球規模の持続可能な発展のための保育所幼稚園の貢献

ドイツは、16 の州から構成される連邦国家で、各州に独自の憲法、議会、政府、裁判所などがあります。幼児教育制度についても、独自のプログラムのもとに州政府が統括しています。バイエルン州政府では、保育は労働・社会・家庭・統合省が取り扱っており、州立幼年期教育研究所（IFP）はこの省の一組織として 1972 年に設立されました。

IFP では、園における自然とのふれあいの取り組みを理解するのに役立つよう、持続可能な開発のための就学前教育の動向について、学術顧問のヴィンターハルター・サルバドーレ氏、幼児教育専門官グーズマン氏、研究所長代理のライヒャルト・ガイスハマー氏よりお話をうかがいました。

バイエルン州では 2005 年に、州の保育要綱として『バイエルン州陶冶保育プラン（BEP)』が策定されました。これによって、子どもの学ぶ権利と、個性や自立性が尊重され、多様な条件の受け入れが可能な保育形態が求められるようになりました。持続可能な発展という点についても、すでにこの中で取り扱われていました。

世界全体の流れとして、2015 年に『持続可能な開発目標（SDGs)』が制定され、貧困撲滅をはじめ 17 の目標が設定されました。これに沿って、ドイツ連邦及び州政府も具体的な取り組みを開始しました。バイエルン州では、17 の目標の 4 番目にあたる『教育の質』の向上に対応するために、『持続可能な開発のための教育プラン（BNE)』が策定され、現在 IFP が取り扱う主要項目となっています。

お話をしてくださった学術顧問のヴィンターハルター・サルバドーレ氏、幼児教育専門官グーズマン氏、研究所長代理のライヒャルト・ガイスハマー氏（右）

室内での座学の様子（下）

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

IFP では、バイエルン州政府環境省と共に BNE の推進に取り組んでいます。BNE の原則は、『持続可能な考え方を行動に移すことを教える』『継続的である』『横断的である』『地球規模の責任』の４つです。BNE を実行するうえでの保育所幼稚園の大きな役割は、子どもに自然とふれあうための機会を与えることで、例えば、虫を探して、名前などを一緒に考え、調べ、学ぶ、この過程が理想的だというお話でした。

BNE を促進するための保育所･幼稚園向けのコンセプトとしては、『一つの世界』、『エコキッズ』、『小さな研究者』、『森の幼稚園』の４つが設けられています。

『一つの世界』は、地球規模で物事を考えようという最新の教育コンセプトです。平等を基本理念に環境意識を浸透させるのがねらいです。認定を受けるには年 2 回の関連プロジェクトの実施が必要です。審査に通り､認定されると『Aine Welt kita』のロゴが施設の入口や建物内などに掲示できます。

『エコキッズ（Öko Kids)』は、すでに 2011 年からバイエルン州野鳥保護連盟（Landesbund für Vogelschutz in Bayern e.V.）との共同で進めてきた取り組みです。自然や環境を守るプロジェクトの提案が認定されると､園の施設の建物内やパンフレットなどに､ロゴとなっているカラスのイラストを最高 3 つまで掲示することができます。グーズマン氏も審査員の 1 人です。今年度は州内 124 園が応募し、89 園が認定を受けました。

2006 年から継続して実施されている『小さな研究者（Kline Forscher)』には、州内の幼稚園の約 90%、保育所の約 80%、小学校の約 60%が参加しています。『森の幼稚園』は、現在急激に増えており、その数はドイツ国内で 2000 程度に及ぶということです。

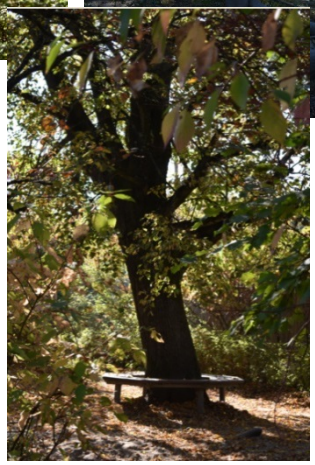
保育所幼稚園向けの『一つの世界』『エコキッズ』パンフレット

■自然の子サンクト・ゲオルグ保育所幼稚園

枯れた木もよい教材になるため大切にしています

ミュンヘンの中心から東に約 20km、周囲に農地が残るのどかな地域にあるこの園には 1 歳から 6 歳のほか、併設する託児所にも毎日多くの子どもが通ってきます。この園では、「自然の中で五感を使って遊ぶことで、知覚機能が発達し、想像力、判断力、応用力が養われ、危険なことなどへの対処もできるようになり、自然に対する敬意や守ろうとする責任感も生まれる」という考えのもと、自然とふれあえる園づくりを積極的に行っています。園長のガビー・リンディンガー氏は、自然のことは 6 歳までに学ぶのが大切だとして、乳幼児期からの自然体験の重要性を強く認識し、そうした園づくりの普及に力を入れています。

この考えを体現した約 3,000 ㎡の起伏に富んだ園庭では、雪が降るとそり遊びもできます。登ったり渡ったりできる太いブナの木を使ったクレッター、ティピ、パン焼き石窯、小型野外円形劇場もあります。また、並んで滑れる幅広の滑り台、ツリーハウス、バケーションハウス、五感を使って歩く小道もあるなど、様々な遊びの要素がちりばめられています。



ブナの木を使ったクレッター（上）

保護者の協力でできたティピ（左上）

幅広の滑り台（左端）初めてで滑るのが怖い子も慣れている子と一緒に並んで滑ることができます

木漏れ日が揺れる大きな木の下の円形のベンチ（左隣）

園庭内にはいたるところに地域在来の草花や大小様々な在来種の木々が生えています。果樹も多くあり、梢には巣箱も見られます。枯れた木もよい教材になるため大切にしています。ジバチのための虫のホテルもあります。穴が埋まっているところは中に卵が産みつけられているそうです。園庭には、たくさんの野鳥のほか、チョウやミツバチ、カエルやトンボ、ハリネズミもやってきます。子どもたちはハチが飛んでいても驚きません。怖がるのは大人だけで、子どもたちは攻撃しない限り刺されないことを知っています。また、危険な場所では注意深く遊ぶので怪我などもありません。

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

隣の畑との境目の土地に、バッファーゾーン（緩衝帯）として地域在来の貧栄養草地をつくり、野鳥が寄りつかないトウモロコシだけのモノカルチャー（単一栽培）の農地と自然の草地との違いを、近所の人など、園に通う子どもたち以外の人にも見てもらっています。

リンディガー氏は、自然豊かな園庭のつくり方や子どもたちへの効果など、自身の園で実践している取り組みについてまとめた本を出版しています。『KinderAbenteuerGarten: Naturnahe Spielräume gestalten』（子ども－冒険－園庭　自然豊かな園庭のつくり方）に続き、この程 2 冊目『Unser Kita-Garten　Naturnahe Spielräum gestalten』（私たちの保育所幼稚園の園庭　自然に近い遊びの空間をつくる）を発行しました。

自然とのふれあいを目的とした園庭ビオトープの取り組みが認められ、この園はユネスコの持続可能な開発のための教育（ESD）の『緑豊かな遊び場賞 2010/2011』を受賞しています。また、生連邦政府の全国規模プロジェクト『保育所幼稚園の子どものための庭　一緒に多様性を発見しよう』にも参加しています。入口には、カラスのロゴ付の『エコキッズ』の認定証が飾ってありました。

この園には、園づくりの参考にしたいと国内各地より多くの保育者が視察に来ます。自然豊かな環境と充実した取り組みが、保護者から最高レベルの評価をもらっていることは言うまでもありません。

リンディガー氏が書いた２冊目の本の表紙（上）

園舎内に飾ってあった『エコキッズ』の認定証。カラスのマークは２つありました（右）

五感を使って歩く小道を裸足になって歩いて見せてくださった園長のリンディンガー氏（上）

「この斜めの板に挟んである紙には、レシピと中国の五行思想のようなものが書いてあります。麦を育てるには土、小麦粉を混ぜるには水、パンをふっくらさせるには空気、焼くには火が必要です」と説明してくださった副園長のペトラ氏

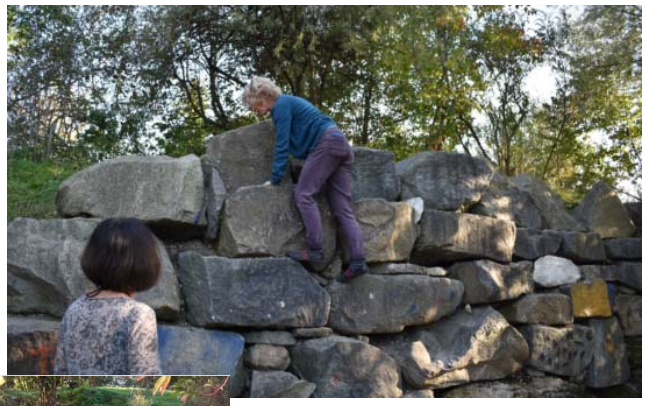
訪問時には、園内で穫れた果物のジュースなどで、歓迎していただきました（下）

■エグルフィング自然体験の遊び場

危険と言って自由な遊びを禁止しては遊び場の意味が無い

この遊び場はミュンヘンの南約60㎞に位置するエグルフィングという町の公園です。町の公園は、普通画一的な遊具があるだけの面白味に欠けるものが多く、ここも例外ではありませんでした。しかし、2004 年、公園の改修計画がもちあがり、町の人たちは自然体験ができる遊び場がつくりたいと一念発起しました。地元の子どもたちや保護者も計画づくりに加わり、遊具には自然の素材のみを使い、全体に地域在来の植物を植えた結果、約 4000 ㎡の敷地は、見違えるような自然体験の遊び場になりました。今では、遠くの町からも子どもたちが遊びに来る人気の公園となっています。設計に携わった自然景観設計士のアンゲラ・ハイン氏が、遊びの実演入りで説明してくださいました。

公園のなかには、いくつかの小山や谷があります。凹凸のある地形を利用して、トンネルと岩登りの壁、水辺などもつくりました。トンネルの片方の入口にはタコの絵を描き、反対側はヘビのモザイクを飾りました。大きな岩でつくった岩登り用の石垣は、上から飛び降りる子もいるので地面には砂利が敷きました。岩の鋭角部分を数カ所削ったほかは、TÜV の審査も難なく通りました。子どもは登れるかどうかを自分で判断し無理と思えばやめるので、未だに事故や怪我はないそうです。



トンネルの入口を飾るヘビのモザイク（上）。冬の寒さで割れたりしないよう、モザイクには良質の素材を使うのが鍵

岩登りの遊びを実演をするハイン氏（上）

火をおこしてバーベキューなどができる場所（左）

ツリーハウスで遊ぶ子ども（下）

子どもたちに人気の斜面にしつらえたクレッター・ミカド（右）

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

子どもたちは水遊びが大好きなので、好きな時に水が流せるポンプも設置しました。地下水を汲み上げた水は溝に沿って小川となって流れて下の窪地に溜まります。ただし、地下水なので飲むのには向かないため、出水口に細いゴムホースをつけて地面まで垂らして、子どもが直接飲まないよう工夫しています。

倒木で作ったクレッター・ミカドやツリーハウスもあります。ツリーハウスは、中心に据える木を育ててその上に作る予定でしたが間に合わず、代わりに太い丸太を柱に据えました。デッキから飛び降りてもよいように、地面にはウッドチップを敷きました。そのうち屋根の上に登る子どもが出てきました。一時は禁止しましたが、危険だからと言って自由な遊びを禁止したのでは遊び場の意味が無いということで、逆に足がかりを付けて登ることを許容しました。

敷地全体を通して地域在来の野草が繁茂し、春から夏にかけてとてもきれいな花を咲かせます。造成時に 100 種以上の野草の種をトン単位で撒きましたが、15 年経って、最近種類が少し減ってきたようです。春と秋の管理日には、自治体の人たちがこぞってボランティア作業をしてくれますが、自然体験の遊び場なので、必要以上に手入れはせず自然にまかせるようにしているとのことでした。

自由な発想が可能な自然の素材は、子どもたちの遊びの枠を広げてくれます。また、四季折々の美しい自然の変化が見られるなど、美的な価値が高いのもこの遊び場の特徴です。この日も食べ物を詰めたバスケットを持ってピクニックにやって来た親子がいました。

巨大な虫のホテル（上）

遊び場に隣接する近隣住民が共同で自然に優しい庭や菜園づくりを行う場所。有機栽培を行っている敷地内の湿地のビオトープにはイモリなどの水生動物も暮らしています（右上）

自然体験の遊び場の入口にある大きな丸太のゲートの前で集合写真（右）

■オーバーアマガウ森の幼稚園

子どもたちは安全に過ごせる範囲を知っていて危険な目に遭うことはない

ドイツ 3 日目の朝は、オーバーアマガウの町の郊外にある森の幼稚園を訪れました。園長のマデルスパヒャー氏の説明を受けた後、子どもたちに混じって森での遊びを共有しました。

2000 年に創設されたこの園には、3 歳から 6 歳までの 18 人の子どもたちが通っています。2 名のスタッフが、7:45 から 4 時間から最長 6 時間まで預かっています。森の幼稚園も普通の幼稚園と同様に、開設には郡政府の青少年局幼稚園部の許可が必要で、その基準は、運営時間が週 20 時間以上、休園日数が年間 30 日以下、幼児教育などの専門知識をもつスタッフがいることです。

利用している森は私有地で、森の幼稚園ということから破格の料金で借りられました。月謝は都市部より大分安く、4 時間で 90 ユーロ、6 時間で 110 ユーロです。そのほか州と市からの補助金（園児 1 人につき月額 200 ユーロ程度）と、保護者の寄付や自治体の支援金、バザーで集めたお金などでやりくりしています。最近、保護者の寄付で道具小屋を作りました。保護者イニシアティブを採用しているこの園では、保護者は入園と同時に保護者クラブに加入し、運営に関する決定やイベントの企画・実施などにも参加してもらいます。会計係も保護者の 1 人が担当しているということでした。

森用の幼稚園入口の看板（上）

自由な遊びの時間になると、いち早く森の奥に走って行った年長の子どもたち（下）

森の入口に用意されたシェルターとして利用しているバウワゴン（上）

四季折々、森で集めた材料で工作をします。子どもたちがクリをつなげて作ったイモムシ（下）

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

訪問時には悪天候時のシェルターとなるバウワゴンに集合しましたが、通常は森の別の場所に集まりその日の遊び場所を皆で決めます。雨の日でも皆外遊びを好み、終日バウワゴン内で過ごすことはないそうです。森の幼稚園で大切なことは、雨や寒さに耐えられる服装をしてくることだそうです。

モーニングサークルが始まると、1 人が集まった他の子どもの数をかぞえ、保育者や欠席している子の人数・名前などを発表しあい、その後皆で歌を歌いました。こうしたことを通じて数や言葉を学んでいます。自由な遊びの時間になると、年長の子どもは森の奥に走って行きました。ほか拾った棒で遊ぶ子、工作をする子、桶のような物に入る子、丸太運びに挑戦する子、木の実を拾う子など、子どもたちの遊びは本当に思い思いで様々です。収穫祭、聖マルティン祭、クリスマス、新年のお祝い、イースター、母の日など、季節に応じた催しには、森にある自然の材料を使って飾り付けや工作を楽しみます。

広い森ですが、子どもたちは安全に過ごせる範囲を知っていて、それより遠くには行かないので危険な目に遭うことはないそうです。心配なときには保育者が笛を吹きます。すると、子どもたちはみんな何を置いても保育者のところに戻って来ます。

バウワゴンの中には、工具などのほか就学前の子どもに適した情報や教材がそろっています。園では個々の園児の成長をまとめたドキュメントを作成し、卒園祝いとして渡しています。「入園を希望する保護者はたくさんいますが、丁寧に対応するためにはこの人数が丁度よいです」と言う園長の言葉に、子どもたちへの暖かい思いが感じられました。

森の幼稚園が利用する森の秋は、おとぎ噺の一場面のように美しい（右）

おちびさんなのに、こんなに大きな木を君は一体どうするつもり?!（下）

桶のようなものも、２人で入れば、楽しい遊具に早変わり（上）

子どもたちと一緒に「はい、スパゲッティー！」（左）

■サンクト・クイリヌス・カソリック幼稚園

長靴や植木鉢も工夫次第で小さなビオトープになります

園舎の向こうに教会の尖塔と山が見えるが見えるこの園の重点コンセプトは、宗教教育と自然教育です。3,722 ㎡の斜面を利用した敷地では、連邦政府の『保育所幼稚園の子どものための庭　一緒に多様性を発見しよう』の参加園に相応しく、ビオトープに力を入れた園庭づくりが行われています。訪問時は、温かい雰囲気の素敵な園舎や2008年に完成した自然とのふれあうための園庭を回りながら、園長のリア・シュルテ氏よりお話をうかがいました。

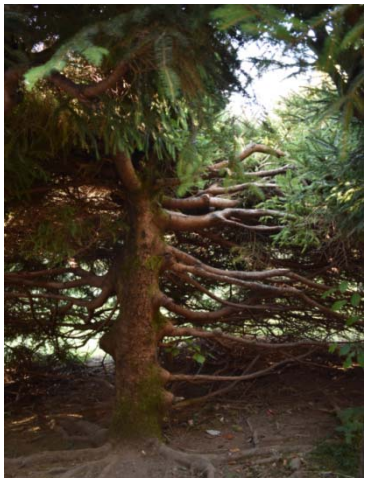
この園には、2歳半から6歳まで約70人が通っています。7時から8時半の間に登園すると、異なる年齢を混ぜた３クラスに分かれてモーニングサークルを行い、朝食をとって少し室内で遊んだ後、天候にかかわらず園庭に出て遊びます。お迎えは12時、午後3時、5時の3段階に設定されています。

夏になると森のような感じになるという園庭には、ハインブーヘ、ヤナギ、マツの一種など、たくさんの地域在来木が生えています。中には登ってもよい木もあります。見守りはするものの、保育者が手を貸すことはないそうです。子どもたちも自分の能力の限界をわきまえていて、無謀なことはしないので、落ちたりすることはないとのことです。

園庭内にはそこここにビオトープがあります。長靴や植木鉢を逆さにしてつくった小さなビオトープもありました。中に藁などが入っていて、多足類などの昆虫の冬の住処となっています。オリジナリティ溢れるデザインの虫のホテルは、貝殻や松ぼっくりの中にも虫が入っていて、子どもたちの恰好の観察材料となっています。枯死木を重ねたビオトープや水辺のビオトープもあります。草はらには在来の野草が生え、昆虫のほか様々な野鳥がやってきます。この日はクロウタドリが遊びに来ていました。ときどきキツネもやって来ます。

虫のホテルと、植木鉢や長靴、ヘッケの管理で出た枯枝を利用した様々なビオトープ

渦巻き型のハーブ花壇（左下）



登ってよいナデルバウム（マツの一種）（右）。枝が階段状になっていて、樹冠にぽっかり穴が開いています。登って頭を出すと周りを見渡すことができます

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ナッシュガーテン（つまみ食いの庭）と呼ばれるコーナーもあり、ブラックベリー、ラズベリー、ブルーベリー、シュタッヘルベーレン（西洋スグリ）、レッドカラント、カシス、ブドウなどが生えています。なった実を自由に食べることができます。ブドウ棚は、保護者の協力で数年前に完成しました。この葉っぱでごはんを撒いて食べるトルコ流のお料理をときどき作って楽しみます。

斜面を利用した敷地なので、雪が降るとそり遊びができます。夏場はポンプから水を流してどろんこ遊びをします。石積みと土盛りをしてつくった山登り気分が楽しめる小山もあります。石の角が尖っているのを心配した保護者もいましたが、怪我をした子は1人もいません。そのほか、保護者の協力でつくったツリーハウス、バランスを取って遊ぶ木の遊具などもあり盛りだくさんです。

園庭の管理は、春先と秋口の年2回の数日間、ガーテンターグを設けて保護者に手伝ってもらっています。シュルテ氏は「支援を得るにはモチベーションをどうあげるかが鍵となります。今年の保護者会では、ビオトープにそれぞれ看板を設置して園庭内を案内し、ビオトープ管理の協力を依頼しました。それが功を奏して保護者の心を動かすことにつながり、今年は多くの協力を得ることができました」と保護者の支援を得るための秘訣を話してくださいました。

園入口のかわいらしい木の門（左上）

斜面になっている園庭には、草はらや石積みなどもあります。園舎の後ろには教会の尖塔と山が見えます（上）

丸い鳥の巣のようなテラピーゲレード。下の穴から入って足を出して車座に座ってブランコのように揺らすことができます。お母さんのおなかの中を想起し、精神的なセラピーの要素もありますが、ここでは遊び道具として使われています（左）

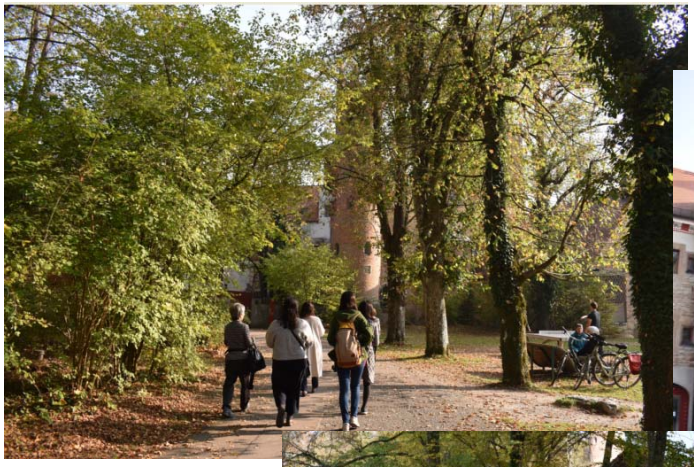
■シュヴァネック城自然体験センター

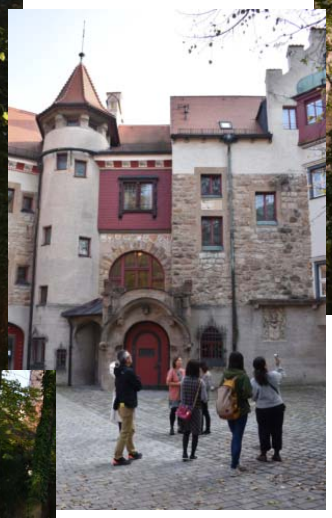
大切なのは、自分自身で経験すること

自然体験センターでは、所長で環境教育プロジェクト責任者のシュレフファー氏と、実習インターンのベンジャミン氏にご対応いただきました。視察では、シュヴァネック城の敷地内をご案内いただいた後、センター施設内でレクチャーを受けました。

バイエルン州環境省が設置したこのセンターは、州内57の環境センターのひとつで、イザール河畔の森に建つシュヴァネック城の敷地にあります。この城は１840年にルードヴィック国王が建設した城塞で、70年前にユースホステルになり、学生や生徒が宿泊しながら自然環境について学ぶ施設となっています。2014年にはシュレフファー氏の企画で、ヨーロッパ各地から40名の若者が集まり1週間の環境会議が開かれました。難民対策にも協力的で、難民の青少年110名をユースホステルで約2年間預かったこともあります。若者たちは、環境教育を受けながら、施設のパーツづくりなどを手伝いました。彼らとのつながりは今も続いています。

他方、大人のための継続教育も行っています。シュレフファー氏自身、別の青少年センターの所長をしていた84～86年、継続教育の一環で受けたここでの研修がとても興味深く、それをきっかけに自分自身も教育に携わりたいと考え、教育者になったそうです。





シュヴァネック城は重厚感とおとぎの国のようなかわいらしい雰囲気を兼ね備えていました

並木道の向こうにお城があります（上）

大きな木がたくさんは生えている敷地内には、ドングリなどがいっぱい落ちていました（右）

ヘッケの勉強に使うエリア（右）
自然体験センターのヘッケはまるで森のようにうっそうとしていました

お城のユースホステルで、リラックス（左）

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

小学生には、1年生が草はら、2年生がヘッケ、3年生が森、4年生が水をテーマに授業を行っています。水がテーマの日は、イザール川の水質検査、水生動物の観察、キャンプなどをして楽しく自然や環境を学びます。ヘッケについて学ぶ日は、木の観察、種名調べ、果実のジャム作りなどをして、見る、さわる、味わう、匂いを嗅ぐなど、五感で楽しめる活動を行います。センター施設の周囲には、子どもたちがつくった池や虫のホテルなどがあります。水辺のビオトープでは、夏場はイモリの卵のほか、水生昆虫の幼虫が20種ほど観察できます。

レクチャーでは、センターが掲げるモットー『自然体験　－　未来を共につくる』をテーマに、持続可能な発展のための重要要素である消費、ゴミ、大気、エネルギー、エコマネージメント、自然の多様性や、センターが行っているプロジェクトについてうかがいました。印象に残ったフレーズとして、「人間は実体験から学ぶので、大切なのは自分自身で経験すること」「子どもに自然環境教育をすることで、親にもよい影響が与えられる」「自分の将来の生活を考え若い人がアクティブになることが必要」「他者との協力やネットワークを作ることが大切」などがありました。

10月14日に行われた州選挙では緑の党が今までより12％多い17.5%へと躍進したそうです。また選挙権のない18歳の若者を対象として行ったアンケートでは、30%以上が自分は緑の党に入れると回答したそうです。自然環境教育の成果がこうした結果からも実感できました。

「ここでの研修がきっかけで教育者になりました」と語るシュレフファー氏（写真中央）とベンジャミン氏

シックな虫のホテル

番外編（旅の風景）

レストラン・コティディアーノでのキッシュの昼食

イザール門とミュンヘン新市庁舎。塔の上からの景色は格別でした

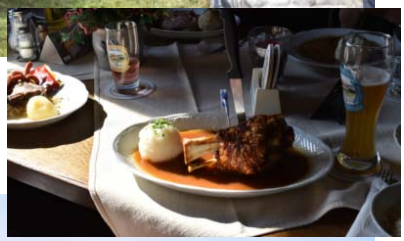
マリエンプラッツのマイバウム

ホテルポスト・ムルナウの入口と郵便の印であるラッパが付いている電気スタンド。昔、郵便配達人の宿だった由緒正しいホテル内には、宿の主人がルートヴィッヒ王と食事をした際に王が使った食器が展示してあります

テガーン湖の透き通った水と水面を泳ぐオオバン

Copyright© 2018 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

アルプスの山々を臨む
山小屋風レストラン、グロブル・アルムでの昼食



オーバーアマガウの街並。赤ずきんちゃんのフレスコ画の家と町のシンボル、コーフェル山

ブレーメンの音楽隊のフレスコ画の家と運転手のハンスさん

冬支度が進むリンダーホーフ城の庭園。真っ青な青空と、黄色く色づいたブナの林とのコントラストがとてもきれいでした

日本生態系協会では、今後も、自然と文化が共存する美しいまちづくりのシンクタンクとして、自然を生かした保育・幼児教育の充実を支援してまいります。研修会の講師派遣、園庭ビオトープづくり・自然を活かした園づくりのコーディネート・アドバイス、そして個別の海外視察ツアーの企画など、みなさまのご要望に応じて対応いたします。お気軽にご相談ください。

公益財団法人
日本生態系協会

171-0021 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル
TEL 03-5951-0244 FAX 03-5951-2974
http://www.ecosys.or.jp/activity/tour/